

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	スナップ
Author(s)	児童の言語生態研究会,
Citation	児童の言語生態研究 , 10 : 54 - 57
Issue Date	1980-05-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045118
Right	
Relation	



個人篇

収録 小泉節子

知世ちゃんの日々

(2才11ヶ月〜3才7ヶ月女)

— 知世ちゃんは報告者の姪 —

(1) 挨拶語の使い分け

きょうから冬休み、おそく起きて下に行く
と、

「おはよう。」

知世の兄「おはようじゃないよ。こんにちわ
だよ。」

知世「えっ、ちがうよ。おはようだよ。こん
にちは、よその人に言うの。」

(S・53・12・26)

(2) 侮辱

私が電話をかけていると、隣りで知世が聞
いている。

「もしもし、今、チッチャイのしか、家に
いないので、少しおそくなります。」

知世「チッチャイのじゃないよ。知世は大き
い。あれだよ。チッチャイのは。」

と、赤ちゃんを指す。

(S・53・12・26)

(3) 幸せ=結婚

山口百恵の「いい日旅立ち」という曲をテ
レビでやっている、最後の歌詞の「……幸
せ求めて旅に出る……」のところで、

知世「幸せてね。結婚することなんだよ。」

「ね」と、自信ありげに言う。

(S・53・10月)

(4) ニギリメシとおにぎり

知世「Sちゃん、何食べてんの。」

「ニギリメシだよ。」

知世「メシのおにぎりだね。」

(S・54・1月)

(5) じゃまもの

絵本を見ていて「とうがらし」を「とがら
し」と読む。

「そうじゃないのよ。とうがらし。う
って、入っているでしょ。」

知世「とがらし。」

「おしいな。とうがらし。ううって
入っているでしょ。」

知世「これが、じゃまだよ。」

(S・54・3・21)

(6) 家の概念

おじいちゃんとおばあちゃんの家から、我
が家へ帰ってきたとき、曲り角のところで、
おばあちゃんが、

「ほら、もう知世ちゃんのおうちが見えて
きたわよ。」

という、ブーとふくれて

知世「知世のうちじゃないよ。みんなのうち
だよ。考えていないね。」

(S・54・3・29)

(7) 春がきたーどこにきた

桜の花が一斉に咲いた日。びっくりしたよ
うに、知世が

知世「Sちゃん、春だね。」

S「うん、春だね。」(少しびっくりして)

知世「Sちゃんも、春だよね。」

S「そうね。」

知世「知世にも、春がきた。」

S「おかあさんには？」

知世「こないよ。大人だから。」

(S・54・3・31)

(8) 死は無を意味する

牛乳の中にパンを入れて、一切れずつ食べ
ている。おいしいおいしいと食べる。全部バ

ンを食べ終ると、

「あー牛乳は、ひとりぼっちになっちゃった。かわいそうだな。」と言いなながら、飲み終るや、

「あー牛乳も、死んじゃった。」

(S・54・5・3)

(9) どうしてもなんだから

S 「Kちゃん(知世の兄や姉)たち、どうしておこられたの？」

知世「どうしても、どうしてもで、おこられているんだから、かわいそくないよ。」

S 「かわいそうじゃない？」

知世「どうしても、どうしてもなんだから……。」

(S・54・5・3)

(10) おたふくの返還

朝私が急いで階下におりていくと、知世が開口一番

知世「知世、おたふくだよ。」

S 「何？ だいふく？」

知世「ちがうよ。おたふくなんだよ。」と抗議母「おたふくになっちゃったのよ。うつつて。」

知世「そう、知世、Kちゃんに、おたふくもらっちゃったの。」

と、いかにも嬉しそうに、パテックスをほっぺにはっている。

二、三日経って、熱が出てくると、隔離される。部屋に私のがぞきに行くと、情けなさそうな顔をしてねている。

S 「どう？ 知世ちゃん おたふく。」

知世「知世、もうKちゃんに、これ返したいよ。」

(S・54・5・4)

(11) たしなめ

下で赤ちゃんが泣いている。もう手を尽したが、だめ、泣きやまない。知世が二階に上ってきて、

知世「Sちゃん、何とかしてよ。」

S 「何とかなんないよ。」

知世「なんで？ Sちゃん、大人でしょ。」

(S・54・8・14)

語学 (1) (三才女・六才男)

知世「これ、知世のだよ。」

深之「知世、知世って、言っちゃあいけないの。女の子は、わたしっていうの。」

知世「えっ？」

(S 54・11月下旬)

語学 (2)

深之「ぼくね。これから、オレって言おうよ。」

だって、これだってオレのもんだしよ。ぼくって言うより、オレっていう方が、男なんだ。」

知世「オレだって。オレだって。」

深之(「こわい顔をして)

「知世は、言っちゃあいけないの、女なんだから……。」

(S・53・11月)

語学 (3) (四才女・六才男)

(どんなボール投げをやっているのかを聞くと) 深之「うん。ドッチとかね。こうあみの前でね。けったりするんだ。ぼくうまいんだよ。」

知世「うまいっていううんじゃなくて、上手って言うんだよ。」

深之「えーうまいです。」

知世「ちがうよ。上手だよ。」

深之「あーこれも、うまい、うまい。」(と、おさかなを食べる)

知世「えー、それはちがうよ。おいしいっていうんだよ。」

深之「ちがうね。うまかった。うしまたったっていうんだよ。」

(S・54・12・23)

こどもの対話篇

子どもの対話

○あきらめのせりふ

おかあさんが炊飯器のふたのちゃんとしま
っていないのを、食事間際に気がつく。

母 「また、×子でしょ、だめ、だめだっ
ていったでしょ。さわっちゃ。」

×子 「さわっていないよ。×子じゃないよ。」

母 「×子よ。」

父 「おい、おまえじゃあないのか。」

母 「×子よ。」

×子 「×子、さわったはずじゃないよ。」

母 「×子よ。」

×子 「いいよ。×子で。」

(S・54・12・27 三才女)

○犯人追求

四月当初は色々な保健行事があり、何かと
その問診表を集めるが、そのわすれものが、
大変多い。机に向いながら、

「やれやれ、まったく。」

と渋い顔をしていると、

C 「先生、どうしたの？ 何がやれやれ、ま
ったくなの？」

「やれやれ、まったくなのですよ。」

C 「Tちゃんも、よくわかんないけど、四月
のわすれものは、おかあさんがいけな
いんですよ。だからTちゃんも家に帰ったら、

おかあさんに、『やれやれ、まったく』っ
て、言うんだ。それでいいでしょう。先生。」

(S・53・4月・一年女)

○限定

給食の時間、ゆで玉子が出た。カラをむい
て、白身を取り除き、きれいに黄身だけを出
して、ニコニコしているO君。

O 「ぼくこれしかすぎじゃないの。」

「これだけ、すぎじゃないの？」

O 「ちがうよ。これしかすぎじゃないんだよ。」

S 「だからさあ、これだけ、きらいじゃな
いんですよ。」

O 「そう、これしか、すぎじゃないの。」

(S・53・5・17・一年男)

○ことばを選ぶおろか者

子どもたちと応対時、

「うーん、ちょっと考えさせて。何といっ
たらいいかな……。」

と、言葉を選んでいると、

W 「先生、どうしたの？ わからないの？」

「どういうふうにいえばよいか、わからな
いのよ。」

W 「言うことわかっているのに、なんでしゃ
べれないんだろう。」

(S・53・6月中旬・一年男)

○え！ わたしのこと？

K 「きょう、K、いやになっちゃったよ。だ

って、いつもKちゃん、って呼ばれている
のに、きょう学芸会の練習のとき、Kがや
ったら、先生Kのこと、

「この人、うまいでしょ」って言ったの。

この人なんて言われちゃった。」

母 「いいじゃない。」

K 「だって、この人なんて、Kじゃないみた
い。いやだよ。」

(S・53・11月下旬・一年女)

○電話故障が原因か？

私が電話しているのを聞いて、

K 「変なSちゃん、だっとうちにいるとき(一
いつもと)全然違っちゃうんだもん。電話
をしていると、全然おとなしくなって、違
っちゃうんだもんよ。」

S 「そう？」

K 「いつもおもしろいのにさあ……。」

K 「電話が変なのかな。Sちゃんが変なのか
な。」

(S・54・4・29・二年女)

○もらわされる

K 「Kなんかね。パラ園の前でね。お弁当食
べたんだよ。みんなったらね、先生を襲っ
ていったね。お弁当とかお菓子とかあげた
んだよ。K、先生がかわいそうだったよ。」

F 「なんで、お菓子もらってかわいそうなの
よ。ぼくなんて、もらったら喜んでしまうの
にな。」

スナッフ

K「Fちゃんて、ちっともわかってないのね。」

(S・54・4・29・二年女と五才男と)

○実力相応

クリスマス会の日、四年生が輪かざりをつけに来てくれた。一年生の色々な子が、ぼく手伝いたいと、申し出る。

4C₁「いいったら、いいったら、ぼくらでやるから……なんか手伝ってもらうとかえって、大変って感じ。おかあさん、よく言うけど、よくわかるな。」

4C₂「『どういたしまして』って言ったら』と他の四年生が言う。

4C₁「『どういたしまして』と一年生に向けて言う。

1Y「なんか、Y、どういたしましてなんか言われちゃって、困っちゃうよ。」

(S・53・12・23・四年男と一年男)

○先生進級

四年生のクラスに補教に行った。チャイムが鳴ってピリオドをうつと、男子がかけ寄ってきて、

C₁「先生、何年生の先生?」

「一年四組。この下の下の教室。今度遊びに来なさいよ。」

と言うと、

C₂「へっ、先生、がんばったねえ。」

(S・53・秋・四年男)

○脅迫されたのは誰か?

A君が学級委員に選ばれた。

A「ぼくは、いやいやみんなに選ばれました。ぼくがやるのですから、このクラスは、どうなるか、わかりません。たぶんメチャクチャになるかもしれませんので、そのつもりでいて下さい。」

T「そんな言い方は、ないでしょう。メチャクチャになったら、ぼくのせいです位、いいなさい。」

A「先生に脅迫されたので、言いなおします。ぼくが委員になるので、このクラスは、メチャクチャになるかも知れませんがたぶん、ぼくの責任になると思います。」

(S・54・4・10・五年男)

○痛覚というものは
理科ノートをわすれてきたので、ポカポカとげんこつをくれていると、こちらの手も痛くなってきた。

「いたいなもう。」

C₁「先生が痛いってことないだろう。ぼくらの方が痛いよ。」

「たたいている方だって、たたかれているのと同じだけ痛いですよ。」

C₂「そんなことないよ。なぐられるやつは、なぐられるっていうだけで痛いんだよ。なぐる方は、なぐるっていうだけで、もう痛

くないんだよ。」

(S・54・5・12・五年男)

○繰返すこと

父母会の翌日、漢字のテストをしていると
K「うちのおかあさんなんてさ、いい先生だいい先生だって、すごい勢いで、ぼやいてんだけどさ、ちっとも、よくないよ。こんなむずかしい問題だしてさあ……。」

Y「ぼやいているのは、おまえだろう。」

(S・54・4・27・五年男)

○特別用語

夏休みに入る訓示

T「くれぐれも体には、気をつけて、何かあったら、すぐに先生に知らせ下さいね。先生は心配で、心配で。みんなを愛しているから……。」

C₁「ギャー」

C₂「先生、悪いけど、そりゃあ、片想いだよ。」

(S・54・7・20・五年男)

○名言

林間学校へ行って、キャンプファイヤーを行った。段々夜がふけてきて山の空は一面の星。

C₁「わあ……星がうじゃうじゃしている。」

C₂「ついに、天が正体をあらわしたぞ。」

(S・54・8・13・六年男)

(東京・成瀬台小・教諭)